常葉学園短期大学英語英文科生の実情と改善の方向性

永　倉　由　里

キーワード／学習者論、動機づけ、学習方略

1．はじめに

本稿は、本学英語英文科生の実情を調査分析し、厳しい現状を真摯に受け止め、教育内容の改善につなげるために記すものである。

まず、各種アンケートの結果から、英語英文科生の「英語学習の目的意識」、「本学の教育内容等に関する満足・不満足度およびその原因」などを読み取る。続いて、カリキュラム、授業内容、教授方法について、改善の方向性を示す。

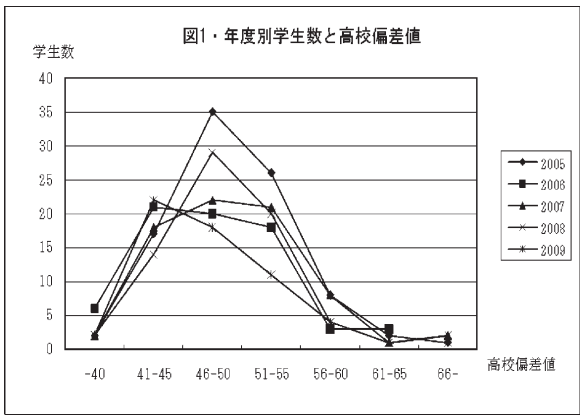
2．英語英文科生の実情　―漠然とした目標意識と高まらぬ満足度―

ここで紹介する調査結果は、いずれも日頃肌で感じている問題点を再確認させ、迅速かつ適切な対応・改善策を講じる必要性を痛感させるものであった。

2.1　出身高校に見る入学者の変化

英語英文科では2005年度の定員充足率138％を最後に、その後は一割ほど定員を割り込んでいる。入学生の出身校の「高校偏差値と入学者数の推移」を見ると、中位校からの入学者が減少し、下位校からの入学者が増加している（図１）。

合わせて、年明け以降の入試での入学者が激減し、入試に備えて“受験勉強”を積み重ねた者が少なくなっている。



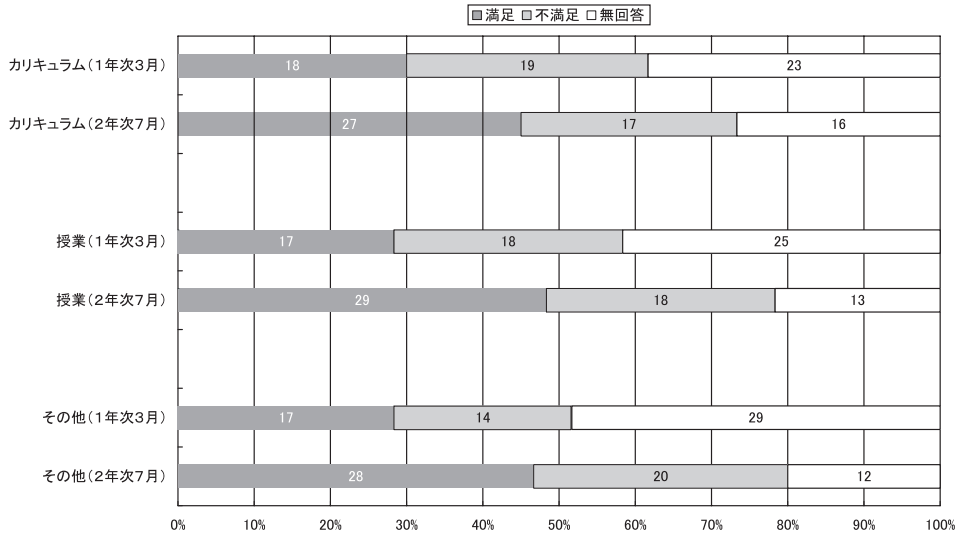
2.2　学生生活アンケート英語英文科追調査

毎年実施される「学生生活アンケート」において、カリキュラム、授業等に関する「満足度」が調査されている。英語英文科では、平成19年度の集計結果を受けて追調査を実施した。具体的には、その半年後すなわち平成20年度の２年生60名に同じ質問を投げかけるとともに「満足」「不満足」の理由を尋ねた。

数値的には、「満足」と答えた学生が増加しているが、ここでは、性急な原因追求は避け、

議論を進める（図２）。

図２　カリキュラム、授業等に関する満足度の推移〔回答者：60名〕



２.３　英語学習の目的に関する意識調査

「満足」とは一般に「求めていることが満ち足りている」状態を言う。従って、「求めていること」が明確であるかどうかが「満足度」に影響することが予想される。

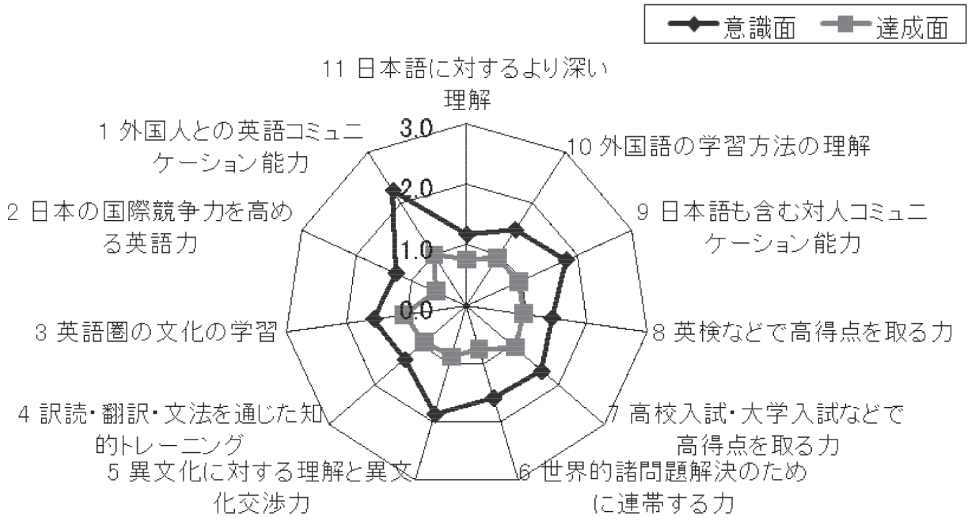
ここで、英語英文科２年生170名に対して、2004年に行った「英語を学ぶ目的」についての調査結果を振り返ってみたい。

英語を学ぶ目的としてあげた11項目についてアンケート（４件法、資料1）を実施したところ、興味深い結果が得られた。すなわち、よく言われる「英語コミュニケーション能力の向上」を目指しているとは言うものの、ビジネス・シーンなどの交渉の場で英語を駆使することはほとんど想定しておらず、文部科学省が掲げる「英語が使える日本人育成のための戦略構想」でその育成を目指している人材とは重ならない（図３）。

総じて言えば、流暢に英語を話す姿に象徴されるような生き生きとして魅力的な人になりたいと考えていることが覗える。この目標は短大での英語学習によって達成され得るとは考えにくく、目標として「意識」している程度と比較し、「達成」されていると感じている程度はかなり低いのも頷ける。

一般に、明確な目的意識を持ち、その達成に向け意欲的に取り組んだ結果、何らかの成果が得られれば「満足」と感じる。つまり、目標に向け、十分に動機づけられているかどうかが、学習の成否に大きく影響するのである。そこで、「満足度に影響を与える要因」として、「動機づけ」に着目し、学生から寄せられた自由筆記の分類・検討に際し、「動機づけ」に関する先行研究を参考にした。

図３　英語学習の目的＜意識面と達成面＞170名



＜集計方法＞ {(ア「強く思う」の人数)×３＋(イ「少し思う」の人数)×２＋(ウ「あまり思わない」の人数」×１)}÷(人数)＝レーダー型のグラフに利用した値
※ 全員がアと答えれば、「3.0」となり、全員がエと答えれば「0」となる。

２．４　動機づけに関する先行研究

「動機づけ」とは、人間の行動の方向性と程度を定める要因である。つまり、人が行動を起こしている場合、何らかの動機づけが作用しており、一般に強く動機づけられているほど、行動の程度も高くなる。

「言語習得」と「動機づけ」との関係では、「内発的動機」と「外発的動機」とに区別することがよく知られている（Dornyei, 2001)。

・内発的動機づけ：楽しみや満足感を得るために行われ、英語学習それ自体が楽しくて続けている場合を指す。
・外発的動機づけ：何らかの目的を果たすために行われ、入試のため、職を得るためなど、他人の意見や社会の要求によって続けいる状態を指す。

動機の継続には内発的動機が欠かせないとされ、その構成要素に着目した「自己決定理論」すなわち内発的動機は下の３つの心理的欲求の充足により高まるとされる理論が広く支持されている。これら３つの心理欲求が「何を求めているか」や「学習に取り組む積極性／消極性」に影響する（Deci & Ryan, 2002)。

・「有能性」：授業内容を理解したい、英語などができるようになりたいと思うこと。

学習に自信を持ちたい、自己の能力を示す機会を持ちたいという気持ち。

・「自律性」：自発的に学習に取り組みたいと思うこと。
学習に対し意見を持ち、選択肢があり、責任感を持ちたいという気持ち。

・「関係性」：教師や仲間と、協力的に学習に取り組みたいと思うこと。
学びに関わる人たちと友好的な連帯感を持ちたいという気持ち。

Dornyei（2001）は、様々な要因が関係していること、さらにそのそれぞれが相互に複雑に関係し合っていることを強調し、教師は学習者の(1)ニーズ、(2)自信と不安、(3)自覚している英語の能力、(4)課題に取り組む際の効率性などを把握し、学習者を十分に理解しなければならないとしている。

英語英文科では、提供しうる教育内容を明示するため「コース制」を取り、それぞれのコースに即した授業や研修を行っている。「コース制」の是非については、受験生は出願時に自らのニーズをどの程度自覚しているのか、設置している 3 つのコースは彼らのニーズに応えているのか、教育内容は英語およびその他の能力や学びの効率性に合っているのかといった教育内容という視点からの議論だけでなく、次の議論とも関連する情意面についての考察も必要であろう。

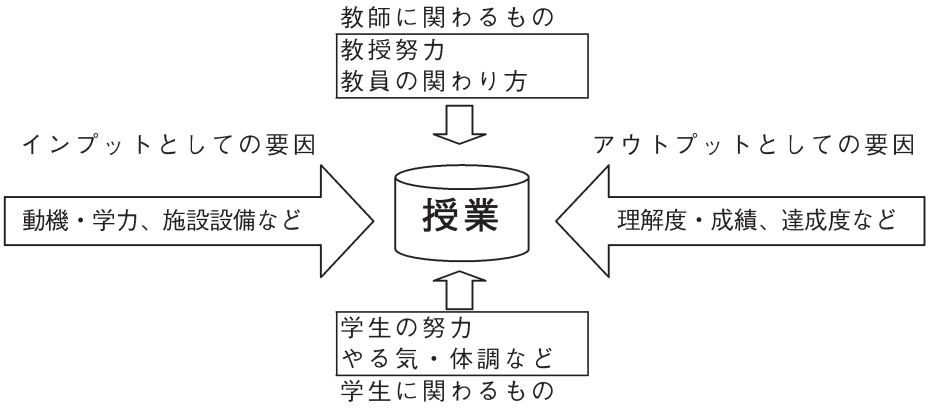
ここで、本学でも導入されている「授業評価」に関する先行研究を紹介する。平成 3 年の大学設置基準の改定により、大学の自己評価並びに FD(faculty development）の重要性が示され、広く授業評価が行われている。学生による授業の段階評価は、データの効率的収集が可能で「教育の質」という難解な概念を定量化できる点が大きな特長である（Eble, 1984)。学生による評価を謙虚に受け止め、授業の改善を図るために有効であるとする意見が多い中、その信頼性には懐疑的な見方も少なくない（Braskamp & Ory, 1994)。

Howard & Maxwell（1980）は、学生の動機と成績および授業評価を分析し、これらの直接的な影響は非常に小さく、学習にまつわる様々な要因が絡み合っているとしている。

特に、溝上（1998）は、授業の満足度は学生自身の「個人的な要因」と密接な関係を持つと指摘している。また、星野・牟田（2005）は、授業の満足度に影響を及ぼす諸要因を分析し、積極的な態度の学生は教師の「教授努力」の直接的影響が最も強いが、消極的態度の学生は「教授努力」と同様「授業における人間関係、コミュニケーション」の影響が強いことを明らかにしている。

また、動機づけの程度だけでなく身についた学習スタイル等が関係して「学習への取り組み方」「傾ける労力」が満足度に作用していることも知られ、「授業評価」に「学生側の取組み」に関する質問を加えて、主体的姿勢の必要性に気づくよう工夫している例もある。
星野・牟田(2003)が表した「授業の満足度に影響を与える要因」（図 4 ）は興味深い。すなわち、①教員に関する要因、②学生に関する要因、および③インプットとしての要因、④アウトプットとしての要因が「授業の満足度」を規定するとし、特に「動機づけ」が満足度与える影響は大きいとしている。

図４　授業の満足度に影響を与える要因



２．５　「満足」「不満足」の原因　―自由筆記の分析―

ここでは、「満足」「不満足」の理由としてあげられた記述を次の４つに分類し（紙幅の関係で適宜省略）、前述の「授業の満足度に影響を与える要因（図４）」および自己決定理論の「自律性」「有能性」「関係性」の３つの心的要因が満たされているか否かを検討していく。

(1) コース制・授業科目の設定・時間割などについて
(2) 各授業の内容・レベルなどについて（授業などでの教員との関係性を含む）
(3) 学科に対するその他の不満
(4) 短大に対するその他の不満

２．５．１　コース制・授業科目の設定・時間割などについて

２．５．１．１　「満足」の理由

＜動機、希望、興味関心などが満たされている＞

○他大学にはない「観光エアサービス・コース」があるから。
○他大学にはない「子ども英語コース」があるから。
○自分で好きなコースを選べて、内容も充実しているから。(18人)
○専門的なことが学べるから。
○英語の役立て方の違いに対応しているから。
○ホテル研修、JAL 研修などの実習を体験できるから。(2人)
○ライフ・デザインについて考えることができるから。(2人)
○２年になり自分の意思で選択できるクラスが増えたから。(5人)
○２年になり、ためになる授業や興味がある授業が増えたから。(5人)

＜関係性が満たされている＞

◇同じ意識を持った者同士で学べるから。
◇先生たちが学生のことを考えて作られたカリキュラムだから。(3人)

「満足」していると回答した者は、希望するコースに所属し、受講可能な授業科目、参加可能な実習などを肯定的に受け入れている。選択の自由すなわち「自律性」が満たされており、向上への期待が持て「有能性」が満たされる可能性を感じているといった理由がそのほとんどを占める（○印)。記述内容から、動機は比較的高く、態度も積極的であることが感じられる。高い動機、積極的な構えが行動につながり、やり遂げたことに対して達成感が生まれるといった好ましい循環が起きている。

また、学生同士の関係性や、学生を思う教師の努力を認めようとする姿勢が表れているコメントも寄せられた（◇印)。

2.5.1.2 「不満」の理由

＜目的、興味関心、希望などが満たされていない＞

◆コース制の割に、みんな同じ授業をとっている。(3人)
◆社会に出て役立つ授業をして欲しい。(9人)
◆それぞれのコースにとって必要なもの、専門的なものが少ない。
◆[特に2年生で]英語の授業が少ない。(10人)
◆体験的な授業が少ない。
◆受けたい授業が少ない。(3人)
◆教養科目で取りたいものがなかった。
◆大勢のネイティブの先生がいるので、もっと内容に多様性が欲しい。
◆国際交流・国際的ボランティア的なことを企画してほしい。
◆英文学を学びたい。
◆イギリス英語とアメリカ英語とアジア英語の比較をしたい。
◆歴史や習慣についてもっと学びたい。
◆〔観エ〕ビジネス系のことを学びたい。
◆〔観エ〕空港関係だけでなく旅行や観光関係の知識を増やしたい。
◆〔子英〕保育士資格が取れない。
◆〔子英〕実習の機会が保育と比べて少ない。(3人)
◆〔子英〕子ども英語の授業が充実していない。(16人) 21年度より改善
◆〔留キャ〕コースに特化した授業が少ない。

＜時間割などの制約によって目的・興味関心・希望などが満たされていない＞

■受けたい授業が受けられない。(5人)
■時間割が合理的でなく、選択肢が少ない。(5人)
■〔子英〕時間的余裕がなく、英語と幼免の両立が難しい。(5 人)

＜学生のライフ・デザインの描き方とコース制が合致しない場合＞

▼入学後にコースを決めるようにして欲しかった。
▼極端すぎる。留学 or キャビンアテンダント？子ども英語？
▼コースはなくてもいいと思う。(2人)

▼もっと色々な沢山のコースがあったらいいと思う。(2人)

＜学生間、教師と学生との関係性に困難な点がある場合＞

●〔子英〕肩身が狭い。保育科に迷惑を掛け申し訳なくなる。(16人)
●〔留キャ〕コースの人数が少なく、肩身が狭い。

＜理解力、判断力などの不足により困難が生じている場合＞

▲どの授業を受けていいか分からなかった。(3人)
▲授業内容がしっかり理解できていなかった。(3人)
▲課題、就活、授業と忙し過ぎてどうしてよいかわからない。

「不満」あるいは「満足していない」理由としては、目的、希望、興味関心はあるのに、それらを満たすものが用意されていない場合（◆印)、時間割の都合上、自由な選択が妨げられ「自律性」が満たされていない場合（■印）の不満が多く寄せられた。

また、年齢的に無理もないことかもしれないが、出願時には目的、志望が明確でない者も少なくないのであろう。何を求めているのかを自覚するに至っていないために、満足感が得られない場合（▼印）も見られる。

ここにあがった教育内容に関する要望は、耳を傾けるべきものである。少数の意見すべてに応えることは難しいが、改善に向け、できるだけの策を講じたい。

子ども英語コースでは、他学科履修により幼稚園教諭免許取得が可能となっているため、授業の過密さ、肩身が狭さなどの心理的抑圧は、同コースの宿命とも言える。しかし、人生においては自分が多数派に属さず、居心地がよいとは言えない状態にも甘んじなければならないこともある。実際、筆者の観察では、幼稚園免許の取得を目指す学生たちは、他学科履修を通じて、次第に現状を柔軟に受け止めるようになっている。

「留学キャリアアップ」コースは、学生数が少ないため、この２年間は「観光エアサービス」コースと合わせたクラス編成になっている。他の２コースと比べ、コースの特長が明示されておらず、早急な対策が求められる。

一般に、目的や希望が明確でない者、それなりの困難を経て、目標を達成した経験のない者は、意欲的にはなりにくく、行動も消極的になりやすいことが知られている。こうした学習と心理的要因のメカニズムに気づかせ、短大の提供する教育サービスのより効率的な活用法を自ら考え決定していくという本来の大学生らしいあり方へと緩やかに促していきたいものである。

２．５．２　各授業の内容・レベルなどについて

２．５．２．１　「満足」の理由

＜有能性が満たされる可能性がある：能力を高めたい、自分のためになるなど＞

□自分のためになるから（2人）
□授業内容が充実しているから。(3人)

□社会に出てからためになることも授業で教えてくれるから。(3人)
□最初はあまり興味はないが、自分の知らないことを学べるから。
□先生方がいろいろアドバイスしてくれ、ためになる。

＜授業の内容、スタイルなどに満足している＞

○英語、異国の文化に触れることができる授業がよい。(2人)
○「○○○○○」の授業がよかった。
○興味が持て、楽しい授業があるから。(7人)
○実際に英語を使っている感覚が持てる授業がよい。
○宿題が多い授業もあるが、どの授業も楽しい。

＜主に担当教員に関するもの＞

◇先生たちは面白いし、役にたつ授業が多いから。(3人)
◇先生方がいろいろ授業を工夫してくれるから。(4人)
◇とても分かりやすい授業だから。
◇ネイティブの授業が楽しい。(5人)

＜意義より「気楽さ」「容易さ」を求めている場合＞

△特に難しい事をやっているわけではないから。
△座っているだけで、授業単位がもらえて楽だから。

2.5.2.2 「不満」の理由

＜有能性が満たされていない：レベルが低い、自分のためにならないなど＞

▼英語の授業レベルが低い。(9人)
▼進むペースが遅い。(5人)

＜有能性が満たされていない：能力・知識不足などのため＞

◆内容が良く分からない。(6人)
◆進め方が速い。
◆授業内容が多い。

＜授業の内容、スタイルなどに不満がある＞

●授業がつまらない。(10人)
●教養科目は、興味を持てないものが多い。
●英語の授業が少ない。(3人)
●頑張ったのに、そうではない子と成績が変わらずやる気がうせた。
●見学、実習の機会が少なかった。
●授業のねらいがわからない授業があった。

●授業の進め方が早い。息抜きが出来ない。

＜主に担当教員に関するもの＞

▼担当教員を自分で選択できた方が良かった。
▼ネイティブの授業なのに教科書通りなのは残念。
▼先生によって授業（楽しさ、内容など）の差が大きい。（10人）
▼先生が合わない。
▼同じ授業なのに担当者によって内容が全然違っていた。
▼先生が変わると分からなくなる。

＜その他＞

・教科書を買ったけど、あまり使わなかった。
・研修、資格試験などにお金がかかる。

「とにかく学生次第だ」「もう高校生ではないのだから」と学生の自主性を待とうという考え方がある。学生の中にも「大学生らしく、選択の自由が約束され、自主性に任せてほしい」という者もいるだろう。教師・学生の双方に「時期を待つ」精神的余裕も必要だが、さじ加減に注意しながら、やる気を喚起する工夫が求められる時代がやってきている。

高い学習成果をあげた学習者や今後も学習を続けようとする学習者は、成功の原因を自らの「努力」「能力」「学習方法」にあると考えるのに対し、学習成果の低い学習者は、その原因を元々の「能力」や「タスクの難しさ」「所属する教育機関」のせいにし、不適切な学習方法と学習成果の関係を重視しない傾向がある（Graham, 2004）。そこで、学習方法の改善を軸に、成功体験、さらには動機づけにつなげようとする考え方がある。近年、特に注目されているもので、自律的な学習者あるいは自己調整能力の育成に焦点を当てた教育改革論である。

前述のように、英語英文科では目標として「英語でライフ・デザイン！」を掲げ、自己を見つめ直し、今後の可能性に期待を抱かせるような心理的サポートも含んだ「若者の思考を支える」授業も展開させている。「英語学習法」に焦点を当てた新しいタイプの授業も開始し、「観光エアサービスコース」の開設と同時にマナー・ホスピタリティー教育にも力を入れている。

新規に設定した科目に対しては好意的な者もいれば、なじみにくいと感じる者もいる。それでも、これまでにない視座に立った教育活動に挑戦する姿勢は保ちたいものである。

「つまらない」というコメントについては、授業の形態も影響しているだろう。概して受け身になりがちな「講義科目」より「実技・演習科目」に対する満足度が高い。学生のやる気を待つばかりでなく、授業の枠の中で「活動」を促すことで、何らかの達成感、プラスの自己評価や満足感が生まれ、積極的態度につながることが知られている。

また、こういった「学び」に関する動機づけのメカニズムに関する知見を紹介し、自己調整能力、すなわち自らを学習に向かわせるかという「メタ認知ストラテジー能力」を高めることの重要性を認識するよう促すことも必要であろう。

例えば、「内発的動機」を高める３つの心理的要因について考えてみよう。これまでの成功体験、達成感、自尊心が乏しい場合には、能力を高めたいとか、そのためなら多少の努力は厭わないという気持ちは持ちにくい。

本学の場合、まず、授業における「関係性」に着目し、居心地のよい雰囲気の中で、信頼と安心を感じられる教師の指導のもと、学生自身が恐れることなく自己を表現できる、そんな学びの場を提供すること、そして、その上で有能性、自律性が満たされる本来の大学らしい学びへと導くべきなのだと考える。

今回得られた貴重な学生の声を謙虚に受け入れ、十分な議論を重ね、たとえ一つでも二つでも具体的な改善案を学生に示し、授業は、学生と教師の「協働」により「質の向上」が図れるものであることを認識し合いたいものである。

話は前後するが、そもそも学生生活アンケートの質問項目として「カリキュラムの満足度」を尋ねているが、質問の意味を理解していたかを問うたところ、残念なことに「カリキュラム」の意味をほぼ正しく理解していた者は55％にとどまった。この例に限らず、我々が意図したことが、思いの他伝わっていないことが多く、授業にせよ、このような調査にせよ、教育活動全般について、さらなる現状把握に努める必要も痛感する。

２．５．３　学科に対するその他の「満足」と「不満足」

２．５．３．１　「満足」していること

- 先生方が親しみやすく、話しやすい。(7人)
- 先生が一人ひとりの生徒に対して親身になってくれる。(4人)
- 研究室は結構入りやすくて好きである。
- 進路支援室の方が就活をサポートしてくれるから。
- 友だちとの仲がよく、毎日が楽しい。(5人)
- 休みが多い。友だちができた。(2人)
- 保育科との授業の中でも人間関係も学ぶ事が出来る。(3人)
- 居心地がいい。過ごしやすい。(2人)

２．５．３．２　「不満」を感じていること

- なんとなくつまらない。
- お金がかかる。
- 相談しにくい。

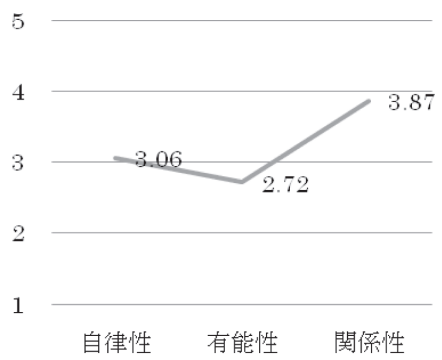
近年、特に小中学校の現場では、生徒を引きつける話術、パフォーマンス能力に優れ、しかも、全国統一で行われる学力調査にもびくつかない学力を身につけさせる、そんなオールマイティの教師が注目され「授業力」向上のための研修が盛んに行われている。

我々も「教授法」のバージョンアップを、自らに課さなければならない時代が来ている。しかし、高等教育機関として、その特性と独自性を保ちつつ、どのような具体的改善策を講じるかは議論の分かれるところであろう。

3　内発的動機の前提条件―自律性、有能性、関係性

これまでも、学習者要因（目的意識、動機、学習習慣、使用ストラテジーなど）に関するアンケートを実施してきたが（永倉、2007、2008）、2009年度の新入生60名に対しては、前述の自己決定理論（Deci et al. 2002）を参考に作成された質問紙（廣森, 2006）を利用し、内発的動機の前提条件とされる３つの心理的条件、「自律性」「有能性」「関係性」の充足度を調査した（資料２）。また、市川（2001）を参考にし、学習方略、意味・思考過程の重視、自己調整能力、学習習慣に関する調査も併せて実施した（資料３）。

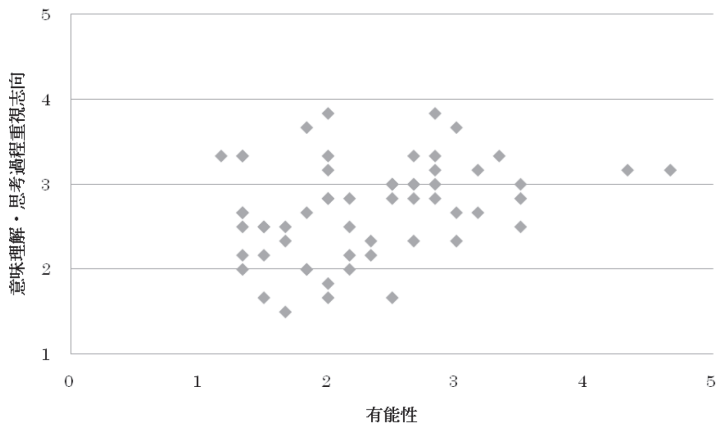
図５　３心理的条件の充足度
（5件法／60人の平均値）



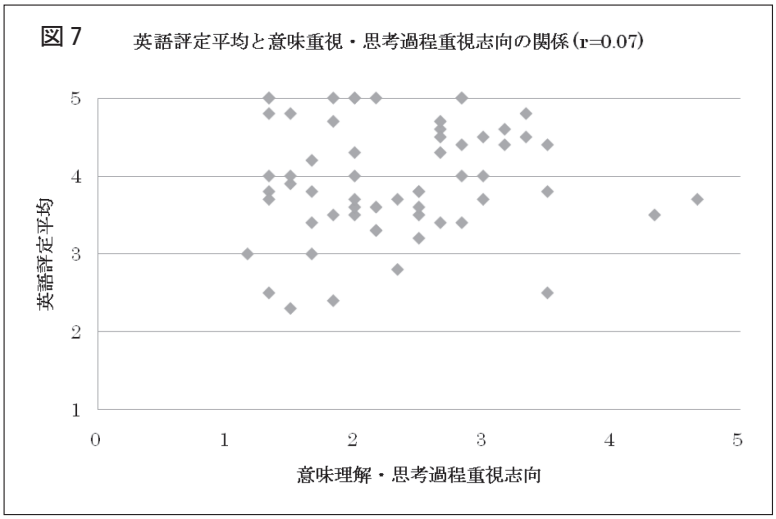
それらの結果、内発的動機の前提条件とされる３つの心理的条件の中では「関係性」に対する充足度が高く、「有能性」に対する充足度はかなり低いことがわかった（図５）。「自律性」については、入学当初よりアンケート調査やインタビューなどを実施し、各自の個別性を意識するよう仕向けていることが影響していると思われる。つまり、自律性がある程度認められていると感じているものの、自律性を発揮し、主体的、積極的に学んでいるとは感じていないと考えられる。廣森（2006）にもあるように、これら３つの前提条件は互いに相関関係があり、特に有能感を持てるかどうかが自律性を左右する点に注目すべきである。

また、学習方略、意味・思考過程の重視、自己調整能力、学習習慣に関してはそれぞれ互いにやや有意な関係にあり（資料４参照）、有能性と意味内容・思考過程の重視の相関関係を調べてみると、これもやや有意という結果が出た（図6、r＝0.32）。近年、「考える力」の乏しい学生の増加を感ぜざるを得ないが、暗記を好み、思考を重ねる習慣が乏しいことが自信の欠如につながっていることが見て取れる。

図６　意味理解・思考過程重視志向と有能性の関係（r=0.32）



入学生の出身高校を見ると、いわゆる進学校は少なく、年内の入試で本学への進学を決めている者がほと



んどで、通信表の成績つまり評定値の割に英語力・思考力が乏しい場合が多い（図７）。

全学をあげて「ライフ・デザイン」教育を謳っているのも、いわゆる「出口の確保」すなわち社会に貢献できる人材の育成を目指すからに他ならない。自身を見直し、社会と関わり、自立した生活者を目指すことは、本科においては、自己理解能力、自己管理能力、自己調整能力を備えた自律的な英語学習者への成長を促すことを意味する。

後で詳しく述べるが、考えて行動しようとする者は有能性（できそうだと感じながら主体的に活動する）がある程度満たされている。本学での教育活動の中で手の届きそうな挑戦を重ねるよう、改善を図りたいものである。

4　学生が求めていること

前にも述べたが、「満足」とは「求めていることが満ち足りている」状態を言う。保育・音楽科の学生と比較し、明確な目的意識を持てないでいる者が多いことは想像に難くない。先の追調査の対象学生はすでに卒業してしまったので、2009年度の新入生55名に、短大に求めること、我々にどんなスタンスでいてほしいかなどをそれぞれ５件法で尋ねてみた。

表３　どんな授業を求めているか（内容、評価法、授業法、教員、雰囲気など）

	学びに関する項目	平均
1	授業科目全般（カリキュラム）	3.38
2	各授業科目の内容・分野への関心	3.58
3	各授業科目の難易度	3.45
4	各授業科目の教授方法（教え方）	3.29
5	各授業科目の教員の性格・熱意	3.55
6	外国人が担当する授業	3.98
7	各授業科目と資格との結びつき	3.56
8	各授業科目と就職との結びつき	3.67
9	各授業科目の評価の仕方	3.00
10	各授業科目の教員による雰囲気	2.56
11	各授業科目の学生による雰囲気	2.82
12	各授業科目で課される課題・テスト	3.02

	5	4	3	2	1	
いい組み合わせ	6	17	24	8	0	不要科目が多い
関心が持てる	6	25	19	5	0	全くもてない
ちょうどいい	8	15	27	4	1	難し／易しすぎる
Good が多い	3	15	32	5	0	Good は少ない
ありがたい	8	22	17	8	0	迷惑
多いほど良い	21	12	20	1	0	多すぎる
多い方がよい	6	23	22	4	0	少ない方がよい
強いとよい	10	21	20	4	0	弱くてもよい
厳しい評価がよい	0	11	34	9	1	甘い評価がよい
緊張感が必要	1	5	26	15	8	気楽がよい
緊張感が必要	4	7	27	9	8	気楽が良い
ある方が良い	5	9	27	10	4	ない方が良い

表４　どんな力を高めたいのか

	高めたい力	平均	5	4	3	2	1
1	英語の能力	4.73	39	12	1	0	0
2	一般教養	4.02	22	16	8	5	1
3	ＰＣ活用能力	3.75	13	19	15	4	1
4	日本語の能力	3.85	16	18	12	6	0
5	意見を持つ力	4.35	25	21	5	1	0
6	考えを伝える力	4.48	30	17	5	0	0
7	知的好奇心	4.19	23	19	7	3	0
8	行動力	4.38	29	16	5	2	0
9	協力する力	4.19	21	22	8	0	1
10	積極性	4.38	26	22	3	0	1
11	計画性	4.19	19	26	6	0	1
12	忍耐力	4.17	18	27	6	0	1

ここで、注目したいのは、最も高めたいのは「英語の能力」であるという点である。入学時の英語力、それまでの学習経験、学習方法が身についている度合いなどの面で、大きな隔たりはあるものの、せっかく英語英文科に入学したのだから、英語の力をアップさせたい。それには、「無理のないレベルで、プレッシャーを感じることなく、居心地の良い環境で学びたい」「ネイティブの授業が多い方が良い」と考えていることがわかる。実は、高めたい力として問うた項目の最後の３つは、短大での教育活動による短期間の変容を期待するのは無理な項目である。その上の数項目も、本学で掲げる「ライフ・デザイン教育」や文科省のいう「生きる力」と直結するものである。

つまり、学生の多くは「ライフ・デザイン力」が不十分であることを自覚している。「積極性」を例にあげれば、学生自身が「積極的になりたい」とどんなに一生懸命願っても、やるべきことを受け止め、それらをやり遂げる方法・手順が思い当り、努力すれば、自分ならやり遂げられるであろうという気持ちになれる者、つまり「成功体験」に裏打ちされたある程度の「自信」を感じられる者でないと、意欲はわきにくい。

この年齢の学生に対して、やるべきこと、やりたいことに向かって、自己を管理しコントロールする能力、自己調整能力、すなわち、メタ認知ストラテジー能力を、少しでも養うよう、支援することが可能か否かという議論もあろうが、ここは、情熱を持って教育活動に従事することを前提に議論を進める。

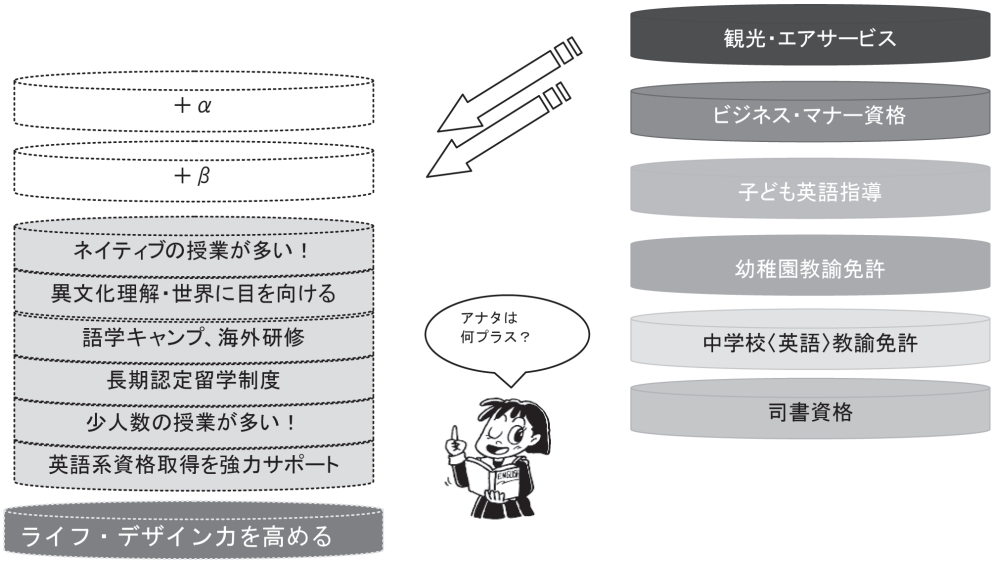
３．英語英文科改善の方向性

３．１　英語英文科らしい到達目標

レベルの如何を問わず、全体としては何より「英語」を学びたいと考えていることが確認された。そこで、現代の社会状況において当然求められる「国際語としての英語」および「異文化理解と自文化理解」といった視点をより直接的に強調すべきであると考える。

国連のアナン事務総長は、「21世紀は対話の世紀である」というスタンスを明確にし、チカラ、カネだけでなく、むしろコトバで対立を乗り越え、合意の枠組みを編成していくことの重要性を説いている（田中他, 2005)。英語教育の意義は、国内・外を問わず、多文化を生きるというコンテキストにおいて、「たくましさ」と「しなやかさ」を備えた人材を養成できるかどうかにかかっており、「国際社会の一員として英語を使う」ということを英語教育の前提とすべきである。しかし、本学の現状、日本人の文化・思考を考慮すると、盛んにその必要性が強調されている「ディベート力」すなわち「言い勝つ力」を求めるのではなく、一人の人間として、My English として英語を使用し、自己を表現する能力を養うよう指導したい。

図８　英語＋α＆βで充実のカレッジ・ライフ



現行の「コース制」は、「英語」の範疇での「学び」を色分けしているのではなく、「英語」に加えて学べる内容、すなわち、『ホスピタリティー』『マナー』あるいは『幼稚園教諭免許取得』『子ども英語指導法』といった“プラスα”の部分が「コース名」となっている。
そこで、何より「話せるようになりたい」という大多数の声に応える体制を整える（図８）。

ただし、入学者の中には、「ネイティブの先生と一緒にいればペラペラになれる」という安易な考えを持つ者もいるので、「学び方」に着目した次節の提案となる。

３．２　「学び方」が身につく“ながれ”のあるカリキュラム

カリキュラム改正となると「科目名」つまり「教授内容」を話題にし、足りないものを補ったり、若干の変更を加えたりするのが一般的である。しかし、学生の英語力にはかなりの差があり、良かれと思って使用している指導法が功を奏さないこともしばしばである。この現状をそもそもの「レベルの差」として見過ごすのではなく、在学中の２年間でそれぞれの「学び方」「取り組み方」を意識させ、より良いものに進化させたいと考える。

筆者は、すでに、『リフレッシュ英語Ａ』において、「学び方」に着目した『ストラテジー・トレーニング』を実施し、その有効性をある程度確認している（永倉、2007、2008）。

一般に、より有能な学習者はより多くの「学び方」を柔軟に使い分けている。他方、そうでない学習者は思考過程を監視したり制御したりすることが少なく、学習を妨げる情緒的反応に陥りやすい（Palmer, 1988）。そもそもの性格なども相まって、学習者により、好んで使用する「学び方」にある種の傾向が生まれ、これを「学習スタイル」と呼ぶ（辰野, 1997）が、各自が自分の「学習スタイル」を知り「学べる人」へと成長してほしいものである。
具体的には、後述のように「到達目標」と「学び方」を明示すべきだと考える。

３．３　メタ認知ストラテジー能力、自己調整能力の育成

前節の議論は、学習者論で言う「自律性のある学習者」の育成と重なる。「自律性のある学習者」とは、「自分の学習をコントロールできる学習者であり、学習管理、認知プロセス、学習内容の 3 レベルにおいて自分の学習をコントロールできる 学習者」、すなわち「自分で目標を設定し、学習計画を立て、それを効率よく実行し、自己評価もできる学習者」である(Benson, 2001)。Holec（1981）では、より具体的に「自分にどのような学習が必要であるかを見極め、学習のゴールを決め、その学習に必要な教材を選択し、自分の不得意な部分を認識し、適切な学習のペースや時間配分を決め、学習をモニターしたり、学習を評価したりすることができる学習者」であると述べている。

このような一連の能力を「メタ認知ストラテジー能力」あるいは「自己調整能力」などと呼ぶが、これこそ「ライフ・デザイン力」であり「生きる力」である。「ライフ・デザイン力」の育成は、当然のことながら、特定の科目のみで請け負うものではない。英語教育を通じた「ライフ・デザイン教育」の実践により、学生たちが「有能性」を感じ、「自律性」の大切さを実感できるような支援・協働のあり方を提案すべきである。

しかし、メタ認知ストラテジー能力を育成するのは極めて難しい。これはいたって当然のことである。メタ認知に関する知識は、情意との結びつきも強く、一般の「知識」より確固たる信念を持って信じられているため、短期間の実験的な教育活動によって容易に変容するものではない。教師は、メタ認知ストラテジー能力が容易に変化し得るものではないことをよく理解し、忍耐強く、学習者のより内省的な学習方法、つまりメタ認知ストラテジー能力を育成するよう支援すべきである。筆者は現在のところ『学習ダイアリー』（資料５）を利用した継続的指導の効果に注目している。

いかなる教育実践にも「個人差」は立ちはだかる。特に「メタ認知ストラテジー能力」における各々の個別性への対応は極めて難しい。「目標設定」にしろ「学習方法の選択」や「自己評価」にしろ、学習者の「意識」や「態度」が影響する場面が多い。すると、英語力における個人差だけでなく、学習志向、学習に対する信条、動機、そもそもの性格や人間関係などにおける様々な個別性が関連してくる。しかも、学習者の年齢が高いほど、メタ認知ストラテジー能力を高めるのは難しいとされている。そのことを承知したうえで、メタ認知ストラテジー能力向上の意義の大きさに期待を寄せ、教育活動にあたりたいものである。

３．４　意識化を促す指導体制

価値観の多様性が尊重され、豊かな時代に「ゆとり教育」の中で育った若者たちは、良くも悪くも自己中心的で、各自の持つ「ものさし」のメモリもそれぞれである。卒業後は社会へと踏み出す彼女らに伝えたいことは山ほどあるが、よく言われる「本来家庭で培われるべきこと」を大学で請け負うのは難しい。また、請け負うべきとも言い切れない。

しかし、ゆったり構えてもいられぬ現状においては、「気づきを促す指導体制」の構築を目指す必要がある。英語英文科では具体的な指針として以前から、「５Ｐ１Ｙ」というモットーを掲げ、各研究室にもポスターを張り出している。

１．Be Positive!　前向きに！プラス思考で！
２．Be Pleasant!　自分に優しく！　人に優しく！

3．Be Polite!　礼儀・マナーを身につけよう！
4．Be Punctual!　時間を守ろう！　期限を守ろう！
5．Be Practical!　行動しよう！　挑戦しよう！
6．Be YOU!!　アナタらしく！

意識化を促すには、効果が上がるよう、ある程度統一した方針が功を奏することがある。昨年度の「迷惑私語」に対するする取り組みのように、問題点を取り上げ、議論し、実行に移せば、必ずや何らかのプラスの効果が生まれるものである。

迷惑私語に対する取り組みでは、全教職員から、正しい「ものさし」が提示されたことに意義があると感じている。あまりに多様な価値観が容認された中で育った者たちの中には、自己評価や判断、目標設定の際に、自らの「ものさし」に自信がない者も多々見られる。

そこで、カリキュラム上の一連の流れのある科目群に、達成目標、授業計画だけでなく、レベル、授業形態、評価の視点などを明示してはどうかと考えている。

表５　各科目の「到達目標」「授業形態」「受講集団」「評価基準」など（例）

科目名	到達目標	授業形態	受講集団	主な評価基準
ライフデザイン・セミナー	ライフデザインの考え方	自己表現 ディスカッション	全員 クラスごと	授業への積極参加 授業レポート
オーラル・コミュニケーション	Real Communication	対話活動	レベル別 5集団	授業への積極参加 対話試験　宿題
カレッジ英語	語彙拡充 文法理解、作文	講義 協働学習	レベル別 3集団	授業への積極参加 定期試験、小テスト得点
ライセンス英語	英検合格	問題演習 解説	レベル別 3集団	英検・TOEICの結果

ここで、自己評価に関する議論を加えておく。近年、企業研修や進学指導においてもマッピングが取り入れられているが、一般に、自身の目標や行動を言語化することの効果は認められており、経験的にも望ましくない行動を減らすというより望ましい行動を促進する効果がある。特に、自己評価の結果が「有能感」につながるように支援したいものである。

Wenden（1998）は、自己認識の改善によるメタ認知知識（英語学習に対する信条）の質的改善が必要だとしている。Cotterall（1999）も、学習者の多くは自己の進歩の程度を評価する能力に自信がなく、それは自分の英語力への自信のなさに関係があると捉える傾向があり、自己評価の訓練が必要だとしている。

自己評価の訓練のためには、教師は、評価のよりどころに配慮する必要があろう。Dweck（1975）は、学習の結果をもたらした要因を追求せず、結果に責任を持たせないと学習に対し無気力になり、一方「努力」の役割を強調し、失敗を努力不足に因るものとすると，失敗の反応への改善が見られたとしている。

Schunk（1982）も、努力帰属トレーニングの有効性について述べており、失敗の原因を努力不足に因るものとすることで、暗に実は「その課題を成功させる能力がある」ことを伝えることになるとしている。

一方、成功は「能力」に因るものとするのが好ましく、成功に対する明白な能力帰属は，自己効力の自覚を促し、行動へと向かわせるとしている。つまり、自己評価の訓練の方向性は、失敗は努力不足に因るもので、成功は能力があるからだとするということである。

また、肯定的な自己評価の例を示したり、個々の学習者の心情に配慮するには、インタビューが有効である（Sakui, K. & Gaies, S. J. 1999）ことにも注目し、学生一人一人と対面しての指導に時間を割きたいものである。

4　まとめにかえて

様々な調査を行ってきたが、その結果明らかになったことは、我々が日頃感じてきたことと一致している。すなわち、「個別性に大きな隔たりがあり、それぞれが自らの価値観をもとに評価を下している」ので、学生全員に合った「レベル」「授業スタイル」「評価法」「雰囲気」の授業や研修を提供するのは不可能である。

そこで、改善案の骨子として、①上記の実態を学生自身にも理解させることと、②それらを踏まえたできる限りの工夫を「カリキュラム」および各「授業」の内容・授業法・評価法等で示すことと、総じて③どれほどの「生きる力」つまり「自己調整能力」「メタ認知ストラテジー能力」をどのように養い、どのようなライフ・デザインを描いていくかは、“自己責任”であることを、愛情と信頼を持って伝えていくという 3 点をあげたい。

熱いうちに叩きそこねた鉄と思わず、これからでも熱くなり、しなやかにたくましく成長する可能性のあることを信じて、学生たちとともに山積する難題に取り組みたいと思う。

＜引用文献＞

Benson, P. (2001). *Teaching and researching autonomy in language learning*. Harlow: Longman/Pearson Education.

Braskamp, L. A. and Ory, J. C. (1994) Assessing Faculty Work, Jossey-Bass

Cotterall, S. (1999). Key variables in language learning: What do learners believe about them? *System, 27,* 493-513.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2002). *Handbook of self-determination research*. Rochester: University of Rochester Press.

Dörnyei, Z. (2001) *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dweck, C.S. (1975) The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 74-685.

Eble, K. E. (1984) New directions in faculty evaluation, in P. Seldin, ed. changing practices in faculty evaluation: A critical assessment and recommendations for improvement. Jossey-Bass

Graham (2004). Giving up on modern foreign languages? Students' perceptions of learning French. *Modern Language Journal, 88,* 171-191.

廣森友人 (2006) 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』東京：多賀出版

Holec, H. (1981). Autonomy in foreign language learning. Oxford: OUP.
星野敦子，牟田博光（2003）大学生による授業評価にみる受講者の満足度に影響を及ぼす諸要因，日本教育工学雑誌27(Supple.)，pp213-216
星野敦子，牟田博光 (2005) 大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足度の因果関係. 日本教育工学会論文誌29(4)，p.463-473
Howard, G. S. and Maxwell, S.E. (1980) Correlation between student satisfaction and grades: A case of mistaken causation? Journal of Educational Psychology 72(6): 810-820
市川伸一 (2001)『学ぶ意欲の心理学』東京：PHP 研究所　p.54~55
溝上慎一（1998）「授業改善に役立つ授業評価」第 4 回 '98FD フォーラム報告集－授業計画・教授法等の研究交流会－
永倉由里 (2007)「英語でライフ・デザイン！―「リフレッシュ英語」でのアメーバ教育論とストラテジー・トレーニングの試み―」『常葉学園短期大学紀要』第38号37-54頁
永倉由里 (2008)「英語学習者としての自己理解活動から見る英語英文科生の個別性―「リフレッシュ英語」における“英語でライフ・デザイン”その 2 ―」『常葉学園短期大学紀要』第39号1-18頁
Palmer, D.J. and Goetz, E.T. (1988). Selection and use of study strategies: The role of the studier's beliefs about self and strategies. In Weinstein, C.E., Goetz, E.T. and Alexander, P.A. *Learning and study strategies*. San Diego: Academic Press.
Sakui, K., & Gaies, S. J. (1999). Investigating Japanese learners' beliefs about language learning. *System*, 27, 473-492.
Schunk, D.H (1982), "Effects of effort attributional feedback on children's perceived self-efficacy and achievement." Journal of Educational Psychology, 73, 93-105
田中茂範、アレン玉井光江、根岸雅史、吉田研作 (2005).『幼児から成人まで一貫した英語教育のための枠組み―ＥＣＦ―』　東京：リーベル出版
辰野千壽（1997）『学習方略の心理学　賢い学習者の育て方』東京：図書文化社
Wenden, A. (1998). Metacognitive knowledge and language learning. *Applied Linguistics*, 19, 515-537.

資料１　英語学習の目的に関するアンケート

1	英語を使って外国人と話が通じる力を育てる
2	世界の中で強い日本経済を作る力を育てる
3	アメリカやイギリスの文化を知る
4	英語の勉強を通じて頭脳のトレーニングをする
5	外国の文化を知り、文化のちがう人々とも仲良くする
6	地球環境を良くするなど言葉の違う世界中の人々と協力して世界をより良くする
7	高校入試・大学入試・就職試験に受かる英語力を育てる
8	英語検定などで高得点を取る英語力を育てる
9	日本語でも英語でも、自分と人が互いにわかりあう力を育てる
10	外国語の勉強の仕方がわかるようになる
11	英語学習を通じて、日本語をもっとよく理解する

ア＝そう思う、イ＝少しそう思う、ウ＝あまりそう思わない、エ＝全くそう思わない

資料２　自己決定理論に基づく内発的動機の３要素に関する質問紙

（５件法：５＝よく当てはまる　←→　１＝全く当てはまらない）

1	英語の授業で勉強することは、すべて教師が決めている。（反転）	自律性
2	英語の授業の課題内容には、選択の自由が与えられている。	自律性
3	教師は英語の授業の進め方などを相談してくれる。	自律性
4	英語を学ぶに当たって、私の意見は重要視されている。	自律性
5	英語の授業でどんなことが勉強したいか、述べる機会がある。	自律性
6	英語の授業を受けるとき、プレッシャーを感じる。（反転）	自律性
7	英語の授業では、教師や友達から褒められることがある。	有能性
8	英語の授業での自分の頑張りに満足している。	有能性
9	英語の授業でよい成績が取れると思う。	有能性
10	英語ができないと思うことがよくある。（反転）	有能性
11	英語の勉強はやれば出来ると思う。	有能性
12	英語の授業では、達成感を味わうことができる。	有能性
13	英語の授業を一緒に受けている友達とは、仲がよいと思う。	関係性
14	英語の授業では、友達と協力して勉強できていると思う。	関係性
15	英語の授業を一緒に受けている友達は、「本当の友達」だと思う。	関係性
16	英語の授業では、友達同士で学び合う雰囲気があると思う。	関係性
17	授業でのグループ活動には、協力的に取り組めていると思う。	関係性
18	英語の授業には、和気あいあいとして雰囲気がないと思う。（反転）	関係性

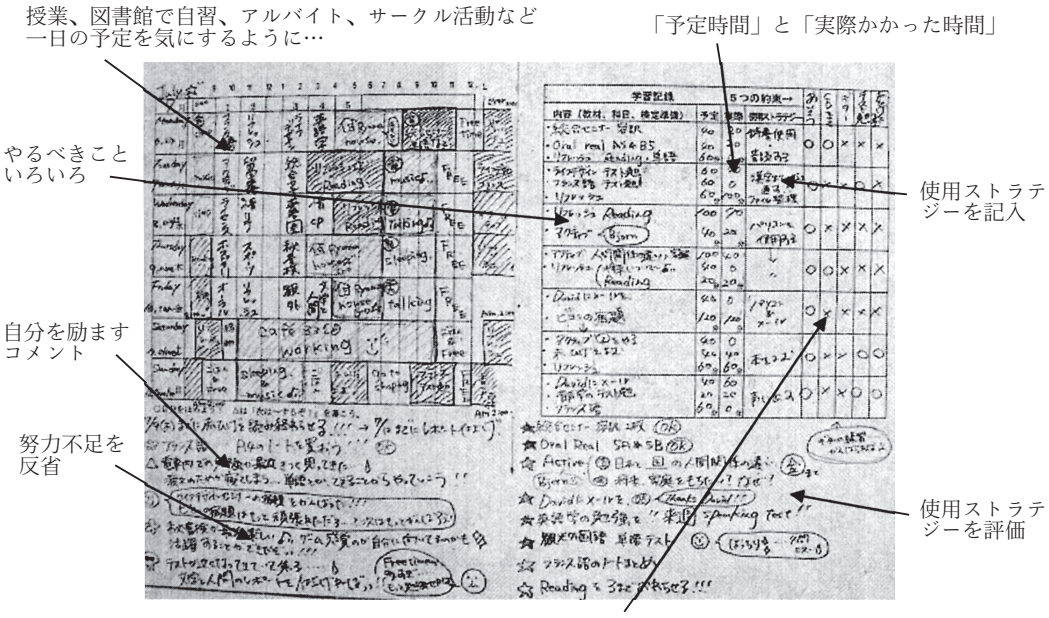
資料３　学習方略、意味・思考過程の重視、自己調整能力、学習習慣に関する質問紙

（５件法：５＝よく当てはまる　←→　１＝全く当てはまらない）※紙幅の都合で一部省略

1	品詞・文型などに意識をはらっている
2	発音やアクセントには注意を払っている
3	例文を用いて学習している
4	繰り返し発音したり、単語や文を読み上げたりする
7	英語は、とにかく覚えることが大事だと思う（反転）
8	答え合わせは、○×をつけて終わる（反転）
9	試験等でカンが当たって○だった場合、あとで復習することはない（反転）
10	いろいろな文法項目や単元が混ざっていると、わからなくなる（反転）
13	今日は何時から何時まで勉強しようと計画を立てることもある
14	勉強の時間を確保するために、テレビやバイトの時間を調整している
15	課題や宿題をするとき、どんなやり方でやろうかと考えている
16	努力は実ると考え、がんばろうと自分を励ましている
20	授業中にわからないことがあると気になる
21	予習をして授業に臨むことがある

１～：学習方略、７～：意味・思考過程の重視、15～：自己調整能力、 19～：学習習慣

資料４　資料３の各項目の相関関係（ピアソンの相関係数）

5件法（平均値，n＝60）	語彙習得方略	意味・思考過程重視	自己調整能力	学習習慣
語彙習得方略（3.5）	1.00			
意味・思考過程重視（2.6）	0.30	1.00		
自己調整能力（3.5）	0.34	0.38	1.00	
学習習慣（3.6）	0.36	0.32	0.40	1.00

資料５　『学習ダイアリー』